

熱き向上心 拳磨く

「空手が人生や仕事に与えたのは『諦めない』という気持ちです」。広告関連業を行う株式会社「マイルストーン」＝那覇市上之屋Ⅱの社長、玉城耕三さん(67)の言葉は力強い。自己を磨くため30代でフルコンタクトの新極真会空手、50代で沖縄伝統空手の沖縄小林流空手道究道館に入門。二つの異なる流派で拳を磨いてきた。「70代、80代でも組手をして好きな空手を続けていきたい」。仕事や健康面で苦しんだ時期もあったが、窮地も乗り越えた。充実した60代。常に前を向き、向上心は尽きない。

(フリーライター・たまきまさみ)

沖縄小林流空手道究道館四段

新極真会沖縄支部吉田道場初段

マイルストーン社長 玉城耕三さん(67)

空手と私

東京で働いていた35歳の時、新極真会東京城南川崎支部で空手を始め、空手にのめりこんだ。「十人組手」も達成し、48歳で念願の初段、黒帯を取得した。仕事も節目を迎え、53歳にな

5年がたった頃、実家から近いビルに新極真会沖縄支部吉田道場が開設された。「両方の空手をやりたい」と悩んだが、同道場の吉田富和師範、究道館の比嘉会長の理解を得ることがで

て帰郷した。「沖縄に帰ったのだから伝統空手をやりたい」と思い立ち、沖縄小林流空手道究道館連合会の比嘉会長の下で型を中心に稽古を重ねた。



「ジツテ」を披露する玉城耕三さん＝那覇市壺屋・沖縄小林流空手道究道館 (落合綾子撮影)

諦めない気持ち 大事に

空手への思いや人生観について語る玉城耕三さん＝那覇市上之屋・マイルストーン



きた。同会長は「空手は一つ。ぜひやりなさい」と認めてくれた。両氏には深く感謝しているという。

現在、月・水曜は吉田道場に通り、子どもたちの指導にも当たっている。土曜午前は究道館で比嘉康雄氏の指導を受け、午後は琉球古武道琉棍会の伊波光忠氏から古武道を学んでいる。

二つの流派で学ぶうち、精神を鍛え成長させる共通点も見つけた。新極真会の組手中心の稽古は強い弱いではなく、激しく突いたり蹴ったりしながらも相手に敬意を持って、互いに内なる会話をすることができるとか。一方、伝統空手はうまい

下手ではなく、型の動きを追求する中で己との内なる会話が可能かどうか。2流派が持つ力を生かしつつ「空手は自他との崇高なコミュニケーション手段の一つ」と感じている。

鍛錬に励む中、人生のピンチもあった。仕事で抱えた負債を解決し、11年前には体にかん細胞が見つかったが克服した。「元気の大切さを知った」という。空手だけでなく社交ダンス、バレエ、書道も学び、チャレンジ精神は旺盛だ。「自分の体をしなやかに動かすことやバランス、精神集中など全てに共通するので飽きない」と笑った。

新極真会の塚本徳臣氏から「年を取るのを怖がらないで。武道は60代が一番強い」といわれ、勇気づけられたという。「うまくなることは考えない。継続すれば人より少し上にはいけることが分かった」。心身の修行はこれからも続く。



玉城耕三さん(右から2人目)と比嘉稔会長(同3人目)、比嘉康雄六段(左端)、伊敷健三段＝那覇市壺屋・沖縄小林流空手道究道館



「さよなら全員組手」後に記念写真に納まる玉城耕三さん(中央)＝2005年1月、新極真会東京城南川崎支部渋谷道場 (提供)

